

青海動物記

田中 騰

蛇 (あが) 教訓の塊のようす群。山ぐって河原の石を蹴ると、蛇の鳴が鳴り声を立てて、まるまるうちには空を真黒にする。黒い小さな虫が体一面にへばりつく。眼のまわりや鼻の孔や脣のあたりは特に不快である。再び一滴テコトをつづ。奴らも、あらしの気配にあせっている。やがてひと塊にひて雨がささちてくると、敵はドヤドヤ、手足にはり、散り散りに消え失せる。テコトの中では、杉江氏が、ひさびさの勝利に安堵のためりきをつく。

墓 (がま) ある朝、石こうの色をした、二角形のカエルを見た。山湫魚 (さんしゅうお) 水の水をありに、オタマジクシの細長いようす。火蟲 (べご) 白蓮洞の深度100mの壁にひついていた。目無しトンボが飛びまわる時代が来うにちがいなし。

蝶 (ちょう) 何度でも、人々みこくすにとまりたがる、一種の幻影のように、舞うすがたは、奇怪である。地獄の中でも何かを伝えようとしている。

蛙 (けい) 彼らは、枯葉のようす模様の背をしている。水の大底でねむっている。

蜘蛛 (ひぐらし) ある隊員は、鳥だと信じていた。夕暮涼風に風鈴がひびくように、鳴く。哀愁をあびた巧妙な響き。「かのかな」。かのうに巧妙に鳴くからには、どれ相当の心を抱いて生存しているのかかもしれない。とうどあるばらばら、われわれの生存の意味だって深いものがあるようだ。気になってくる。

熊 (くま) プナの大木には、必ずつめ跡が残っている。人間の手の平ぐらいの大きさ。登るとさと降りるときの二種類。

蜜蜂 (すずめばち) 彼らは、それめて、友好的であった。蛇のように、がつがつしたところがない。

人間 (にんげん) ほろほろにあた版、され、ひきつった筋肉、殺氣ばした目つき。ためりきとゆくび。彼らは、今日も、昨日も、どとわれ人夫のようすに、戻へ降りていった。時には、いちいちくも、苦力のゆく、ザイルで梯子を引き上げる。よいとまけの敵が、きこえてくる。闇の中にうごめく、暗い暗い心。